

幼児の健康上の問題

船 川 幡 夫

私は医者であり、特に、子どもの保健方面の事をやっている関係で、今日は幼児の健康問題について話をするようにと言われました。

これまででは、どうも、幼児の健康上の問題についての関心は乳児のそれにくらべて一般に高くないようでした。この理由の一つは、乳児は母親がいつもそばにいて、常時子どもを見ているわけですが、幼児の場合はそうはいかず、母親の眼から離れていることが多く、監督が行きとどかないとか、次の子どもにも手がかかって上の幼児はとかくほうっておかれるというようなことが幼児の健康問題が取り上げられにくい理由の一つであるようです。

いったいに、幼児期は、ひとりの子ども対母親というより、むしろ、社会の中の子とも対お母さんということになってきて、

健康問題もそういう点を念頭において考えなければならぬのです。病気についても、乳児の病気の原因は個体に多いのですが、幼児では、そのまわりの環境が多く影響します。したがって、幼児期のうちは個体が問題となり、幼児期になって来ると、集団が中心になって取り上げられて来るのが健康問題の一つの特徴なのであります。そこで今日は、こういう特徴を考えながら幼児の健康問題ではどういう事を取り上げるべきかについて、時間の許すかぎりお話ししてみたいと思います。

まずはじめに、幼児期というのはからだの上でどういうような発達状態にあるのかという事が考えられます。子どもは生まれた時は、身長およそ五〇センチ、体重三キロぐらいです。そして最初の一年間には七キロぐらいふえますが、一年が過ぎると、年間の増加量はぐっとへるものです。でありますから、幼

乳歯の萌出から脱落

		萌出期 (月)	根完成 期(月)	吸収開 始期(年)	脱落 期(年)
上 顎	I	7.5	18	4	7
	II	9	24	5	8
	III	18	42	8	11
	IV	14	30	7	9
	V	24	36	8	11
下 顎	I	6	18	4	6
	II	7	18	5	7
	III	16	39	8	10
	IV	12	27	7	9
	V	20	36	8	10

(Schour)

幼児体力検査基準

	4 才		5 才		6 才	
	男	女	男	女	男	女
走 (秒)	7.7	8.1	6.6	7.2	6.0	6.6
立 巾 跳 (cm)	90	85	105	98	117	106
投 擲 (m)	5	3.5	7.2	4.4	10.2	5.8
荷重走 (秒)	4.5	4.7	3.8	4.2	3.3	3.5
けんすい (秒)	60	60	80	80	130	130
片足とび (m)	27	27	50	46	85	73

牛島・波多野編「性格と社会性の検査」

巖松堂 昭24年より

は少ないのですが、しかし、心とからだのはたらきのそろった子どもとなるためには、決して放っておいてよい時期ではないのであります。殊に、幼児期は外との接触が多くなるにつれて心の発達の目ざましい頃であること

児時代は発育量という点から言つては、子ども時代では、一番少ない時期なのです。したがつて、からだの外見上の発育の問題はあまり多くないということになりましょう。しかし、幼児期は、発育量こそ少ないのですが、からだつきの点ではだんだん変化して来る時期であります。すなわち、幼児期は手足の発達がかかんで、また、からだつきから言えばしまつてくるのです。表面はあまり変化しないけれども、からだの中では徐々に変化しているわけです。一つの例として、歯の発達を取りあげてみますと、幼児期は、乳歯が永久歯に変化する時期であります。ですからこの時期には、カルシウムや、ビタミンDなど歯が作られる為の必要な栄養素がいかに多くいるのかということ

がわかるのであります。

また、この時期の運動能力はどうでしようか。この運動能力の発達程度を見るということは、実は、非常にむずかしい問題なのです。しかし、いくつかの我が国の研究から見ますと、だいたい二十五メートル走るのに十秒ぐらいかかるとか……というようなおよその標準がつくられてはいます。しかしこれも一つの目安にすぎないものです。このように、幼児の時代の発達は目にはつきり見えるような形の上よりも、むしろからだの中で、運動能力とか歯の発生などというはたらきが徐々に変化しているのです。したがつて、この時期に何か異常があると、あとまでひびいてくるわけです。たしかに目に見える幼児の病気など

は、いうまでもないことですから、今日はこの点は省かせていただきますしよ。

それでは次に、幼児期では、とくにどんな病気をとりあげたらいかがをお話ししましょう。まず、幼児期の伝染病ですが、昔からくらべて今は、極端にへった死亡原因の代表は結核であります。その次にへったものは、消化器系の病気で、次に赤痢や疫痢が続いています。実は、これらの病気がまったくなくないということではありませんが、少なくとも、それで死ぬということとは少なくなつて来ているのです。これに対してへりかたの少ないものは肺炎など呼吸器系のものであります。また、全然かわらないというより、むしろだんだんふえつつあるものは、先天的というか、生れる前に原因のある病気とか、事故による死亡です。ことに、この事故については、また、あとでくわしくお話しすることにして、では、まず、伝染病の数はどうでしょうか。注意しなければならぬことは死亡数と病気の数とはちがうものです。赤痢や疫痢は数はほとんど減つておりません。すなわち、数がへっていないくて死亡者がへったということは、治療によつてなおる率がふえたという事で、かかる人は相変わらず多いのです。こういうことは他の伝染病でも考えておく必要があります。こういう点から、考えねばならないのは、死亡までは至らない軽い病気です。はしか、おたふくかぜ、水ぼう

そうなどは、数としてはほとんどかわつておりません。これらの病気は、薬屋から薬を買つて来て自宅にねかせておけば大部分は、比較的簡単になおつてしまふので、数は多いのにあまり問題にならないのです。しかし、このようななまはんかな治療の結果、手おくれになったり、伝染病の保菌者となつている場合が非常に多いのです。このような現状のもとで同じような年頃の子どもの集まつている幼稚園などで、子ども達を伝染病からいかに守るか。このために一つは、予防注射が行なわれていきます。予防注射は最近だいが徹底して効果も上がつて来ましたが、しかしすべての病気に對して予防注射ができるわけではありません。だから伝染病は予防注射によつてへったということも勿論ありますが、衛生教育の徹底や環境のよくなつたことによつてもへつたのだともいえます。したがつて、伝染病の多い少ないは、集団生活の内容や、衛生教育のやり方などによつても非常に影響があると考えられるのであります。

次に事故についてお話ししましょう。幼児は水によつての事故の死亡が一番多くなつて

幼児(1~4才)の不慮の事故死
(昭36年)

	男	女	計
鉄道による	116	52	168
自動車による	577	426	1,003
可燃物 火及び燃物による	77	77	154
液体 高温物による	105	91	196
水	1,442	746	2,188
計	2,648	1,620	4,268

おります。それに続いて約千名の幼児が自動車の事故によって死亡しており、このほかは、数は少ないがやけどや墜落死が続いています。この水による事故は性差がはっきり出ておりまして、男児が女児の倍ほどの数になっております。交通事故は男女の差はありません。しかし墜落などの事故はまた、男児が女児の倍ほど多くなっています。

次にけがはどんなものが多いでしょうか。これは年令によつてずいぶん違つてきますが幼児ではきりきず、さしきずが最も多いのでありまして、次は、脱臼、骨折が多く、そのあとやけどなどが続いております。これらは子どもの行動性から考えてみてもわかることではありますが、男女差などかなりはっきり出ています。さて考えなければならぬのは、交通事故でありまして。これによりますと監督者や周囲の者が気をつけなければ起

医療を受けた事故の種類

(岐阜医大 館教授 昭34年)		
1.	骨折、脱臼、ねんざ	19.0%
2.	裂傷	44.6%
3.	打撲	16.2%
4.	火熱傷	12.7%
5.	其他件数	7.5%
		543件

幼児の交通事故原因

(被害側) 東京都 昭31年		
1.	幼児のひとり歩き	337
2.	車の直前、直後横断	281
3.	車道とび出し	210
4.	路上あそび	137
5.	其他	286
計		1,251

ずにすんだという事故がずいぶん多いことがわかります。つまり環境の影響が非常に強いわけでありまして。

このように、幼児期は個体より社会環境による病气や事故が多いのですが、果して今までその幼児の健康問題が充分に考えられてきたでありましょうか。私はこの健康問題の中で医者の立場として、どういう事に注意していただいたらよいかということをお話ししてみようと思います。

まず栄養ですが、幼児の栄養についての関心は、これまでは比較的うすいものでした。しかるに、幼児は外部にははっきりと見えなくても体内では徐々に大切な変化がなされている時期で、この栄養問題は大切な問題でありまして、小学校に上がったからの給食だけではなくこの時期の内容を考えた栄養教育は、幼稚園から行なつてほしいと思つております。

次に先天性股関節脱臼の発見ですが、これは乳児の初期に発見していれば比較的簡単になおるのですが、幼稚園に入つてからでもまったく見込みがないわけでもありませんから毎日の観察からもし発見したら、できるだけ早く専門の医者に相談してほしいと思います。また斜頸ですが、これも乳児の頃早く発見することが大切ですが、発見がおくるといろいろ問題がありますから、見かけたらすぐ医者に相談してほしいものです。

次は喘息ですが、これは体質的なものもありますが、最近注目されている事はアレルギー性のもとか空気のごれている所では喘息の数が増加しているのではないだろうかということであります。この空気の汚染による喘息は明らかに公害が子どもにも悪影響を与えていると考えられます。

皮膚のいろいろな疾患の問題につきましては、体質としてかぶれ易いものもありますが、最近はいろいろな薬剤が皮膚にふれたりすることによって過敏症や皮膚炎をおこしている子どもがあります。いろいろな着色剤が肌に合わないでそれらの疾患をおこしている場合も案外多いのです。

それから視力、聴力、言語の問題ですが、この中で聴力の問題がひとつあります。これは学校で最近では、難聴児の早期発見のためのいろいろ努力がなされておりますが、幼児期での難聴はあんがと言語のおくれとしてとりあつかわれているようです。またぼんやりしている子どもときこえない子どもとの区別はなかなかむずかしいのですが耳の遠い子ども、よくきこえない子どもが案外ぼんやりしている子どもの中にいるのではないのでしょうか、注意していただきたいと思ひます。

同じ事は視力の面でも言えることであります。潜伏性斜視、これはいっしょうけんめい努力をはらつてものを正しく見ようとしているのです。そこでこのような眼筋の緊張から、落ちつ

きがなくなったりすることから、落ちつきのない子どもなどを単に性格的な面からだけ考えないようにすることが望ましいのであります。

最後に自家中毒をちょっとつけ加えておきます。この原因はすべてつきとめられているとはいえませんが、便秘や疲労などが要因として考えられることはあります。この治療を考えますと、体質改善など純粋な医学的なものになりますが、日常生活の上でも排尿排便をきちんとさせるとか、疲れすぎないようにさせるなどの注意を必要とします。

ふとりすぎややせすぎについては、最近は特に都会ではふえつつあるようです。ふとりすぎの病的なものとそうでないものとの区別はむずかしくて医学的な検査を要するのですが、簡単な区別はむずかしいということをお頭に置いて慎重に判断することが大事です。あまりふとりすぎていたりする子どもがいるようだったら医者に見せてほしいと思ひます。ふとっていても汗をかく量が多い子どもの中には応々にして内分泌の障害などがあるのです。やせすぎは最近はまだ多くはありませんがやせすぎでないまでも、どうしてもふとれない子どもというものがいるのです。しかしやせすぎという基準はむずかしく、幼児期は一般にやせるといふことは、からだがしまつてきているからとも考えられます。

さて幼児の健康上の問題、これは地域によってずいぶん差があるということが言えます。同じ都会でも生活環境によってずいぶん違います。したがって幼児の病気のあり方なども、その幼稚園のある地域、生活環境によってずいぶん違うということ、先生方は常に考えていただきたいと思います。

次に身体の発育から言えば、三才位までは胎児の時の発育の力すなわちおもに遺伝などの力によって発育してきているのですが、それが三才を過ぎる頃からは体内のホルモン、脳下垂体のホルモンなどによって発育し始めます。したがって三才位の子どもは内部的きりかえ、変換の時期でありますから、思春期と同じように、外界と体内のアンバランスが起こったりするなど、外からの影響も中へひびくことが多いのであります。またこのような変換期は思春期と同じように個体差がかなり多いのであります、三才、四才、五才をひとつの集団として、単位として扱ってしまうことにはかなりの問題があります。医学的立場からは、幼児としての特徴はあっても、三才、四才というように年令としての特徴は言えないのです。個体として考えなければならぬのであります、幼稚園でも個体差を常に考えてほしいと思っております。

最後に今までの幼稚園教育、集団生活、幼児をとり扱う状況において、健康上の問題があまり見向かれなかったようです

が、これからは是非幼児の健康問題もとりあげていただきたいものと考えます。そして、そのためには

○既往歴をはっきり調べてつかむ。

○子どもの体質傾向を知る。

○子どもの生まれた時の状態、すなわち出生時の状態がどうであったかを調べる。

○家族なり生活環境を知る。

などが大切であります。これらをもとにして日常の観察をするわけです。この点から、朝、子どもたちが登園した時に顔色を注意してみるといふこともたいへん役立つことであります、どこを見ればよいかはむずかしいことですが、何となくいつもと違う、元気がないなど、かんと言っておりますが、そういうことが非常に大切なのであります。それと体質的な傾向などを考え合わせますと、病気などを未然に防げる場合がずいぶんとあるのであります。

以上をもちまして、私の話を終りたいと思います。御静聴ありがとうございました。

(国立公衆衛生院)

(第16回幼稚園教育実務指導研究会における講演より)